

# マグネシウム、研究、そして野球

理工学部 教授 岡 浩太郎 おか こうたろう

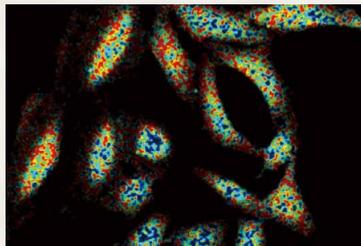
工学博士を慶應義塾で頂戴し、その後企業に9年ほど勤め、母校の教壇に立つようになってからもう24年経つ。自分ではシュレーディンガーの『生命とは何か』に触発されて、生命現象の担う「モノ」ではなく「コト」に着目し、さまざまなイメー  
ジング技術を武器に研究を進めてきたつもりである。

20年ほど前から細胞の中のマグネシウム(Mg)イオンに注目している。大変感度よくMgイオン計測ができる色素を応用化学科の鈴木孝治教授(当時)が開発されたことをきっかけに、Mgイオンの細胞内動態を調べてきた。研究を始めた時の「そんな(マイナーな)研究をしていると職を失うぞ」という先輩研究者からの温かいご助言(?)や、投稿論文が軒並み掲載拒否されて、落ち込んだことが忘れられない。遅々としながらもミトコンドリアから放出されるMgイオンが神経細胞のエネルギー代謝など多くの細胞機能に関わり、機能維持を亢進することを明らかにすることができ、生物系では多少知られているジャーナルに、これまでの仕事の集大成を昨年掲載できた。今年になってこれまでの仕事を英文総説として発表し、Mgイオンに対する風向きが少し変わってきたのを感じている。

さてこの9年間は体育会野球部の部長を務めている。シーズン中に「慶應の選手にはMgイオンを飲ませているのですか? それで強いのならドーピングだ!」と義塾の躍進に冗談を飛ばされた他校の部長の言葉で、Mgイオンの評判もこれで定まったと思った。野球は、優勝パレードで秋季シーズンを終えることができたが、91年ぶりの10戦全勝は早稲田に阻まれた。一方で東京六大学野球連盟理事長として郡司主将に天皇杯を渡すことができたのは生涯の思い出となる。研究室では、やれ統計だ、有意差だ、と言っている自分が、神宮のベンチでは精神論を振りかざす。研究室の学生が見たらさぞ驚くことだろう。一方で実証的な生物科学研究では、まずやってみることが重要で、一度や二度の失敗に挫けないことは大切だ。「練習ハ不可能ヲ可能ニス」はスポーツだけでなく、研究の現場でも至言である。できると思うと不思議にできるものである。



東京六大学野球 2019 秋季リーグ閉会式。野球部主将の郡司裕也君に天皇杯を授与



細胞内のマグネシウム (Mg) イオン

談話室

教員によるエッセイコーナー